

《書評》

高倉浩樹編

『寒冷アジアの文化生態史』

古今書院、2018 年、120 頁

本多 俊和*（スチュアート ヘンリ）

TAKAKURA Hiroki, History and Cultural Ecology of Boreal Asia, Kokonshoin, 2018

HONDA Shunwa (Henry Stewart)

本書を出版する発端は 2015 年 12 月に東北大学東北アジア研究センター設立 20 周年の記念事業である国際シンポジウムの「東北アジアの人類史と環境適応」セッションにある。セッションの発表者との調整を行ない、セッションでの英語発表を日本語にする、あるいは新たな寄稿を求めた結果が本書である。

本書の書評を編者の高倉さんに頼まれたとき、私はシベリアなどの北アジアの状況に通じていないことを理由にいったんお断わりしたが、高倉さんから、個別的な内容に対する評論ではなく、全般的な批評を期待しているといわれ、書評を書くことを引き受けた次第である。

以下の書評では敬称を省略することをあらかじめ了承されたい。

本書の構成は岡 洋樹の「巻頭言」と高倉浩樹の「はしがき」につづいて、鹿又吉隆の「北東ユーラシアにおける人類の最寒冷期への適応」、大西秀之の「アイヌ・エコシステムの舞台裏：民族誌に描かれたアイヌ社会像の再考」、高倉浩樹の「永久凍土と人類文化の相互作用：東シベリア森林地帯における動的自然・ミクロ環境・進化をめぐる考察」、大石侑香の「西シベリア森林地帯における淡水漁撈とトナカイ牧畜の環境利用」、平田昌弘の「生態環境が育む北アジア牧畜の特徴：西アジア牧畜との対比から」、そして最後に高倉の「後書き」となっている。

5 つの論文には、生態環境、政治環境、経済環境などの環境的な変動にどのような人間が適応してきたかという理論を背景に、主にシベリアに焦点を当てた寒冷アジアのいくつかの地域、もしくは民族が経験した歴史的な展開というテーマが貫かれている。

鹿又論文では、北半球の極北地帯において数千年にわたって、細石刃という特殊な小型石器を骨角製の柄に植え込んだ、組み合わせ式の槍先や鉋先の出現と展開は氷河期末の最寒冷期の自然

*放送大学 元教授

環境への適応技術だと論じている。このような物質文化を駆使して、材木が乏しい環境の中でマンモスなどの大型動物を能率的に捕獲する経済基盤が築かれた。

理路整然とまとめられ、説得力のある論述であるが、いくつかの点に関して疑問を感じた。一つは、骨角製の柄に細石刃を埋め込んだ槍先は木材の乏しい「マンモスツンドラ」に適応する工夫（11 頁）としているが、細石刃の技法は森林が生い茂る北海道、そして日本列島全体へ広がっていった〔萩原 2001〕理由は何だったのだろうか。また、細石刃技法が出現したとされるアルタイ山麓の当時の植生に関する情報があれば、生態環境と細石器文化の興亡に関する議論により説得力があったし、読者が議論の当否を判断する材料にもなると思う。

さらに、細石器を利用することは石材の節約になる（16 頁）と述べているが、黒曜石が豊富であり、森林地帯が広がっていた北海道などでは、細石刃技法が伝播する理論的な背景は何であったかについてもっと丁寧な説明がほしかった。

本論文でもっとも私の注目を引いたのは、「北米大陸への移住者の起源が日本列島であった可能性」があるという一文である。その根拠として、日本列島に多く出土する有舌尖頭器は沿岸環境への適応によって北米大陸へ移り住んで、南米大陸にまで広く分布する「魚尾型尖頭器」へ変容したとの解釈である（19～20 頁）。文面通りに解釈すれば旧石器文化の担い手だろうか、あるいは縄文文化の担い手が日本列島を出発して、北米大陸へ移動したという意味になろう。「日本に合計 1,630 ヶ所（の有舌尖頭器出土遺跡）あり、過密地帯といえる」という記述は、過密状態が原因に日本列島から人が移動したとする意味だろうか。

それはそれとして移動ルートの検証が示されてないし、サハリン以北では有舌尖頭器は確認されていない〔長井 2017〕などの未解決の課題があり、北米の「魚尾型尖頭器」の起源を日本の有舌尖頭器に求めることには説得力が弱い。

縄文との関連（21 頁）では、北米大陸の初期渡来者に関する物質文化以外、生物人類学のデータがある。頭蓋顔面多変量分析の結果、初期渡来の南米の人びとはアウストラロ・メラネシアとの類似性よりも、縄文などの後期洪積世の北東アジア人との類似性が強いという分析結果はあるが、こうした類似性は必ずしも両者の間の遺伝的関係を意味しない〔Seguchi et al 2011 : 13〕。

もっとも、縄文文化の担い手は北東アジアに遺伝的なルーツを持っているので、「縄文人」に共通する遺伝子が北東アジアにあるので、日本列島が北東アジア、そして北米大陸へ移動した理屈にならない。北東アジア（ベーリンジアの西側）にさまざまな集団が集まり、遺伝子流動があったとされる〔Moreno-Mayar et al 2018 : 4〕。そのなかから北米大陸への初期渡来集団は一回であり、1 万年以前の北・中・南米の諸集団は共通の祖先の末裔であると考えられている〔たとえば Graf & Buvit 2017; Raghavan et al 2015; von Cramon-Taubadel et al 2017〕。一部であれ、北米大陸への移住者の起源は日本列島にあるという大胆な仮説について、慎重な検討が必要である。

大西論文は自然環境ではなく、政治の環境的变化に応じて適応した 14～19 世紀のアイヌ社会——いわゆる近世アイヌ社会——における社会的な統合とリーダーシップのあり方に関して北海道と千島列島に限定した数百年の範囲内に起きた周囲地域の経済的、政治的な動きに反応して適

応したという視点を中心に論じて、従来の受動歴史観の再考を促す論文である。とくに泉 靖一の「イオル」論と渡辺 仁の「アイヌ・エコシステム」論の民族誌モデルを批判的に継承しながら、「忽大将」や「忽乙名」と呼ばれていたリーダーが出現した外部の社会史的な背景と、アイヌ社会においてリーダーの役割と位置づけの変遷を説いている。

大西論文の特徴の一つは、文理融合ならぬ文・文融合（後述の学際的研究）の視点である。つまり、1960年代から噴出して学界を風靡してカラハリ論争にみる伝統主義と修正主義という視点を動員して、外部の影響を受けた14～19世紀のアイヌ社会がどのように適応したかに関する議論はカラハリ論争を連想させるものである。

高倉論文は気候変動による特殊な地形——アラス——が形成されることによって複合的な生業活動——牛馬放牧、狩猟、漁労の組み合わせ——が可能になった歴史的過程を東シベリアの事例を挙げて考察している。

地表面を覆う氷床が断熱材となって永久凍土があまり発達しなかった西シベリアと比べて、厚い氷床に覆われなかった東シベリアでは永久凍土が広く深く形成された。そうした環境で落葉針葉樹林帯の条件の下で、まだら模様で凍土が完新世の温暖な気候において溶けて、地表面が皿状に陥没してできるアラス地形が生成された。気候変動影響でできあがったアラスという直径10キロ～数10キロの草地と湖沼でサハ人は牛馬を飼育する条件が整ったことだという。筆者がここで強調するポイントは、環境は文化・社会に制約を課するものの、決定するものではないという点である。

調査地が西シベリアで大石はハンティ（Khanty）民族がソ連崩壊後を中心とした時代に成立していくトナカイ放牧、漁撈と狩猟を組み合わせた複合的な生業活動に対する民族誌的な調査成果を述べている。寒暖の差が大きい当地の生業活動は、基本的に暖かい夏と厳寒の冬の2つの季節に分かれる。とくに私の注意を引いたのは、漁撈を前提としたトナカイ飼育法に関する記述である。トナカイ放牧と狩猟と漁労が相補う生業活動ではなく、ハンティ社会において漁撈はトナカイ飼育を可能とする必須要件であるという。一つは、放牧のトナカイを住居の近くの牧柵へ誘導するために、魚を食べるように餌付けされたトナカイが柵の中にある魚の臭いを嗅ぎつけて戻ってくることである。また、魚の餌付けをすることによって人間に馴れる群れの「リーダー」格のトナカイを馴化させることにある。トナカイの群れを放牧させるとき、袋に魚を入れた牧夫が群れの先頭を歩いて、魚の臭いにつられる群れを目的の方向へ誘導することである。

ハンティの独特なトナカイ飼育方法はこれまで詳細にわたって記録されて来なかったというので、大石論文は重要な意味をもっている。

今後の調査では、草食動物のトナカイに魚を食べさせる、しかも魚を好物になるほど覚えさせる飼育法についていくつかの疑問を説く情報を収集する必要がある。ネネツの影響を受けてハンティはトナカイ放牧を15世紀ごろにとり入れたというが、いつから魚餌付けをはじめたかに関する伝承や考古学的な情報はないものだろうか。魚を食べるのが主にリーダー格なのか、群れ全頭が食べるのか、さらに食べる量はどのぐらいなのかに関する情報もほしい。

根本的な疑問は、草食に特化した反芻動物であるトナカイは問題なく魚の肉を消化できるように、どのような育て方をしているのかに関して、動物学者との協同研究が望まれる。そのほかに、幼獣は自然に魚を食べるようになるのか、それとも人工的に馴れさせる飼育がなされているのかについての情報が必要なのである。

カナダのツンドラ地帯のカリブー（野生トナカイ）がふるい「落ち角」をかじることで知られているが、トナカイが魚を食べる現象を説く手がかりとなるかも知れない。

さらに欲を言うと、魚の餌付けをしていないハンティの周囲の社会でのトナカイ飼育について、たとえば牧場へ誘導する方法や夜に柵に群れを戻すとき、ハンティが魚で群れを誘導する方法の代わりに、どのように誘導しているかなどに関する比較考察がほしい。

平田論文は、考古学、遺伝解析と乳文化のデータを動員して、乳利用を伴ったヒツジ・ヤギ牧畜の起源は西アジアに求め、北アジアに知られる類似文化は西アジアから伝播した二次的に展開したものだと論じている。その上、生態環境の違いによって両地域の繁殖管理法と乳利用法が異なっている。地中海性気候の西アジアでは、主に11～2月に生まれてから数ヵ月で離乳する幼獣に食べさせる、栄養に富む草本科の発芽する2～4月に繁殖管理を行なう。一方、冷涼気候のモンゴルでは、出産時期を3～4月に調整して草の新芽が多い5月下旬以降の時期に合わせて離乳させる。

生態環境に関連して両地域の乳文化の違いも知られている。西アジアでは発酵乳系のバター、バターオイル、バターミルクが多いのに対して、北アジアでは生乳から分離したクリームを加熱してバターオイルを加工して、凝固剤を加えてチーズを作ることと、酸乳酒を作る。この違いは生態環境に影響されるが、ほかの論文でも指摘されているように、環境の変動は文化的な選択肢を増やすという視点は本論でも指摘されている。

北アジアの乳文化は西アジアから伝わってきたというのが、乳文化の発祥地の一つである西アジアではラクターゼ活性持続症、すなわち赤ちゃんは1歳前後になるまで乳糖を消化する能力が持続される一方、世界各地では1歳を過ぎると子どものその能力が減少する。しかし、西アジアなどの限られた地域で赤ちゃんは生長する過程でその能力がなくなるしない遺伝子を持っている〔Silanikove et al 2015〕。西アジアから乳文化が伝播するまでは、「ヨーロッパ人」が乳糖は消化できないという乳糖不耐症の遺伝子を持っていたが、乳文化を携えた西アジアの集団が持っていたラクターゼ活性持続症はヨーロッパ、とりわけ西ヨーロッパ以北の住民の間に普及して、牛乳などは生で飲めるようになった〔Allentoft et al 2015〕。一方、北アジアに広がった乳文化に伴い、ラクターゼ活性持続症は伝わらなかったことから判断して、西アジアから北アジアの乳文化の伝播は集団移動によらないで、乳文化が広がってきた結果であると解釈すべきだろうか。

それでは、本書の理論的な支柱である「文理融合」について考えることとしよう。文理融合的な研究はこれまでなかった論理と認識され、実施することによって新しい地平線が拓かれるとする風潮は2000年代に入って学界を風靡した。現在、以前ほど強くないとはいえ、消滅しているわけではないが〔増田 2010〕、「文理融合」は依然として研究資金、とりわけ公的資金を申請す

るのに欠かせないキーワードとなっている。ところが、申請書の多くには文系の研究成果と理系の研究成果を融合するとはどのようなことなのか、そしてどのような研究態勢で実施するかについて具体的な手順が示されることはほぼ皆無である。要するに、人文社会学者と自然科学者の名前がともに申請書に連なっていれば「文理融合」的な研究になるという弊害がある。

文理融合は学問上の新しい潮流と言いがたく、従来の文系の人文社会科学と理系の自然科学をまたがる学際的研究と区分することは事実上困難である。ここで、混同しがちな文理融合と学際的研究の間に違いがあるという前提でその2つの理論を使い分ける基本的条件を提案しようと思う。簡潔に言えば、学際的研究はそれぞれの分野が必要に応じて他分野の情報を活用するものだとする。要するに、文系と文系、理系と理系、あるいは協働研究をしていなくとも文系と理系は他の研究分野からの研究成果を援用することは学際的研究になる。

文理融合は文系一つ以上の分野と理系の一つ以上の分野が各々の目的と役割を決めて協働して共通の課題を追究する態勢を組んだものだとする。

学際的研究の事例として、1973年に縄文時代の海進海退をテーマに私がまとめた卒論を示す。特段の気負いもなく、理系の情報を動員して当時では学際アプローチといわれる研究だった[スチュアート 1982]。沿岸地帯の遺跡分布から手をつけて、海水面の変動について陸地に残された痕跡を調べるために地質学、海水面はいつ変動したかについて年代測定のほかに、気象学、地球物理学の研究成果をフルに動員した。私自身が自然科学的な調査をしたのではないし、課題に沿う自然科学的な調査協力の依頼はしなかった。

一方、文化人類学が参加する文理融合的な研究の事例は知る限りにおいてあまり多くなく、文理融合とは何かの理論的な考察が目立つ[たとえば思 2016]。文化人類学を中心として現地調査を伴った文理融合研究には、高倉が進めてきた、あるいは関与してきた研究は本書でも収められているサハ共和国で実施してきた一連の研究がある。自然環境変動に対する社会の通時的な対応に関する文化人類学の調査に呼応して、河川工学、水文学、土木工学などの理系分野が実証する研究を行なっている[Takakura 2018 参照]。

極北地帯の文系研究には必ずと言っていいほど気候変動に関する気象学、雪氷学、動物学などの理系研究の資料が使われているが、日本では理系の研究には文系とのコラボレーションはきわめて少ない。本書がお手本となって、極北地帯の研究に文系と理系の協力関係が定着するよう、「文理融合」という標語が効用を発揮することに期待したいと思う。

参考文献

スチュアート ヘンリ

1982 「海進海退」『縄文文化の研究』1巻、pp.130-142

長井健治

2015 「完新世初頭の北東アジアにおける石器製作技術の実験考古学的研究」三島海雲記念財団
(<http://www.mishima-kaiun.or.jp/assist/2551.html>)

萩原博文

2001 「縄文草創期の細石刃石器群」『日本考古学』12: 1-20 日本考古学協会

増田 研

2010 「学際研究そして文理融合は必要、だけれどもけっこうしんどい」

http://www.aa.tufs.ac.jp/~gisr/forum/2010/ws02_masuda.pdf

思 沁夫

2016 「文理融合型(分野横断)」,「学際的」研究とは、『OUFC ブックレット』8: 125-135, 大阪大学中国文化フォーラム

Allentoft, Morten et al

2015 Population genomics of Bronze Age Eurasia, *Nature* 522 (7555): 167-173

Graf, Kelly & Ian Buvit

2017 Human Dispersal from Siberia to Beringia, *Current Anthropology* 58, Supp. 17: S583-S603

Moreno-Mayar, J. Victor et al

2018 Terminal Pleistocene Alaskan genome reveals first founding population of Native Americans, *Nature* 553, (7687): 203-208

Raghavan, Maanasa et al

2015 Genomic evidence for the Pleistocene and recent population history of Native Americans, *Science* 349 (6250): 841-854

Seguchi, Noriko et al

2011 An alternative view of the peopling of South America: Lagoa Santa in craniometric perspective, *Anthropological Science* 119-1: 21-38

Silanikove, Nissim et al,

2015 The Interrelationships between Lactose Intolerance and the Modern Dairy Industry: Global Perspectives in Evolutional and Historical Backgrounds, *Nutrients* 7: 7312-7331

Takakura, Hiroki

2016 Limits of pastoral adaptation to permafrost regions caused by climate change among the Sakha people in the middle basin of Lena River, *Polar Science* 10: 395-403

von Cramon-Taubadel, Noreen; André Strauss; Mark Hubbe

2017 Evolutionary population history of early Paleoamerican cranial morphology, *Science Advances* 3-2: 1-9.